

人間国宝が来た！問題児編

スバルん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間国宝として75歳まで生きて生涯に悔いのない生活を送り逝った大垣御幸は神様であるメタトロンの手によって【問題児たちが異世界から 来るそうですよ?】の世界に行くように言われた、大垣御幸は行く条件として『絶対に負けない力』と『自分が進めていた研究の完成』を条件に異世界へ旅立ったのであった

目次

エンディングでは無くオープニングでもなくプロローグ	1
第一章 『人間国宝の新たな家族（仲間）』	
仲間一号の獲得	5
人間国宝ノーネームの本拠地に行くよ	9
人間国宝と問題児達が決闘するみたい	15

エンディングでは無くオープニングでもなくプロ
ローグ

5月4日 午後8時22分18秒

人間国宝大垣^{おおがき} 御幸^{みゆき}は75歳でこの世を去った。

死んだ筈なのだが……

今、大垣御幸は見渡す限りの白の世界にいる。

そして目の前には幼女がいる。

「たしか、俺は75のジジイで死んだと思うんだが？」

「そうね、うん確かに貴方は死んだわ」

「じゃあ何で俺はここに立っている？それも全盛期の体で？そしてお前な誰だ？」

「貴方の気持ちは分かるわ、でもまずは落ち着いてちょうだい。後、そんな一気に質問しないでくれる？」

「あ…ああすまんかった」

「それで宜しい。じゃあまずは私の事からね」

そこから彼女は事細かに説明してくれた。

彼女の名前はメタトロンと言っただけでかなり有名な神様で今俺のいる真つ白な世界も彼女の監視下の元にある世界らしい。彼女曰く自分は五万といる神の中で頂点に居てその力はビッグバンに匹敵するとか？しないとか？、そして何故俺がここにいるのかと言うとメタトロンが監視してるのは主にアニメの世界でその中にある【問題児たちが異世界から 来るそうですよ？】の世界が安定してないらしく、安定させるためにこの俺大垣御幸が指名されたわけだ。何とも有難迷惑な話だ。ついでに問題児の世界に付いても教えて貰った

「ふむ、話は分かった」

「理解が早くて助かるわ〜」

「ああそうだ、もう一ついいか？」

「何かしら？」

「まさかとは思うがタダ働きじゃないよな？」

「そ…そのような事があるうはずが御座いません」

「だよねえ」

メタトロンは苦笑いを浮かべて顔を縦に振った事を確認した上で大垣は話を進める

「じゃあ、俺からの条件は二つ」

大垣が人差し指を立てて一つ目の条件を言う。メタトロンはゴクリと生唾を飲み一言も聞き逃さぬように大垣の顔を凝視する。

「まず一つは、あつちの世界で絶対に負けない力だ」

一つ目の条件を言い終えて、もう一本指を立てて最後の条件を言う。

これもメタトロンは聞き逃さぬように大垣の顔を凝視する。

「俺の進めていた研究を完璧な状態にして欲しい」

「分かったわ、一つ目の絶対に負けない力って具体的にどの位なの？」

「どんな奴が来ても瞬殺、秒殺出来るぐらいの力」

「ほんとに良いの？つまらなくなるわよ？」

「それでいい、楽したいからな」

「分かったわじやあ始めるから十分位にじつとしてて」

「ん」

「十分後」

「準備完了よ」

「これと言った変化は見られんが…まあ当たり前か」

「力に関しては行ってから試してちょうだい」

そう言つてメタトロンは床にワープさせるための穴を作り送り出す準備を整える。

「この穴に入ればあつちの世界に行けるわよ」

指さすさせには真つ白な世界にポツンとある真つ黒な穴、

「これ…大丈夫なのか？」

そんなものを見たら誰だつて不安、疑問ぐらいは浮かぶのは当然だ、問われたメタトロンは満面の笑みで返答した

「きつと大丈夫さ、心配するな♥」

「お…おう、じゃあ行つてくる」

メタトロンは手をヒラヒラと振り大垣を見送り姿が見えなくなつたことを確認し、椅子と机とテレビを創り出しテレビを見始めた。画面に映るのは大垣御幸であった

「さあ…つてどれ程の人か見させてもらうわよ人間国宝君♪」

メタトロンが椅子に座ろうかと思つたらコツンと椅子の足に何かが当たる音がして、メタトロンはしゃがみ込み確認する

「およろ？なにかしら？」

球型？のような物を手に取り見みるとメタトロンは驚愕した

「う……嘘でしょ!？」

手に取つたそれは大垣御幸か希望した『絶対に負けない力』だった
「ま…まさか…拒絶したつていうの!？」

そういつた考えに至つたメタトロンは再度球に目を落とす

「あれ？でもちよつとだけ減つてる………はっ！」

考えた結果メタトロンは一つの答えを導き出した。

それは、元々大垣御幸は既にあつちの世界に行つてもほとんど負け

ることの無い程の力を有していた、大垣御幸はそれを見越した上でメ
タトロンに足りない分の力を要求した。つまりダシに使われたわけ
だ

「これは……一杯言わされちゃたわね」

☆H A・H A・H A☆と少し大袈裟に笑うい仰け反った状態で小声
でこう言った

「それで死ぬようなことがあったら承知しないわよ？大垣御幸」

ここから、人間国宝大垣御幸の新たな人生が幕を開けるのであった

第一章 『人間国宝の新たな家族（仲間）』 仲間一号の獲得

今、大垣御幸が降り立った場所は池のある所だった。

当初の予定では問題児達と一緒に行ってもらう予定だったが、メタトロンの手際でそれが叶わず、今立っている場所は本来問題児達が召喚される場所に立っているわけで、メタトロンはそれを承知の上で大垣を送り出し、行く場所を伝えたのだ。

大垣は事前にメタトロンから教えられた通りの場所から真っ直ぐ歩き出す

「たしか奴は西に一キロ行った場所に滝があり、そこに住まう蛇神だっけ？水神？かなんかを倒して、仲間にするといいつて言ったな」

大垣はメタトロンに言われた事を思い返しつつ言われた場所へと向かう

〜十分後〜

「ここがアイツの言ってた所か」

大垣の前にあるのは大きな滝、そこに住むのはメタトロンが言っていた水神そいつを倒して仲間にするが大垣の目的であって決して殺すことではない、だが久々の戦いでちよつと興奮気味の大垣は殺気を周囲に放っていた。そうすると滝から大きな蛇が出てきて喋り出した

「誰だ我に向かって殺気を向ける無礼者は！」

（思ったよりでかいな）

大垣は水神の予想外の大きさに少し驚いた、だが驚いたのは大きさだけであってそれ以外は全て予想の範囲内：いや予想を下回る結果であった。

「御託はいいから俺と決闘しろ」

「付け上がるなよ人間風情が」

水神は三つの大きな竜巻を大垣に向かって放った、それは普通人間

が受けきれぬような攻撃では無い……それは、あくまでも普通の人間であればの話であつて、大垣御幸はと言うと勿論ただの人間では無い「なっ!!?」

「おいおい、こんなもんかよ? 水神つてのはよオ」

「くっ! まだだ! まだ終わつてはおらん!」

「いいや、お前は次の攻撃をするより早く俺がお前を沈める」

「調子に乗るなよ人間風情があああ!!」

刹那、水神が創り出した水の槍は放たれること無くただの水となつて戻つた、それは同時に終了の合図となつて水神は気絶した。

「やっぱり弱いな」

そう言いつつ大垣が気絶した水神へと近寄り水神の顔面を蹴っ飛ばした

「おい、おきろ」

バコンツ!!

およそ人間の蹴りで出せる様な音では無い音が鳴り響き、水神はあまりの激痛に目を覚ました

「貴様! 何をする!」

「寝てたから起こしただけだ、そんな事より俺はお前に勝つたんだが」

「そうであつた、では貴様の願いを聞いてやろう」

「願ひは一つ俺の仲間になれ」

大垣から放たれた仲間になれという言葉に少し考える水神、そして決心したように返事をした

「良いであろう、貴様の願ひ聞き入れた」

そう言い水神は蛇の形から人の形へと姿を変えた

「ここから先、我は未来永劫ご主人様と共にお使いする事をここに誓います」

水神はたか膝を付き頭を下げた、大垣は頭の中にあるチエツクリストにチエツクをした。

「俺に敬称はいい、それとお前名は?」

「いえ、敬称は付けさせて頂きます。名は白雪姫と申します」

大垣は後頭部を掻き水神に自分の名とある条件を出した。

「俺は大垣御幸だ、これからはご主人様ではなく名前か苗字で呼べ」

「わかりました御幸殿」

「それでいい、じゃあ」

そう言っただ垣は自分の人差し指の先少し切り血を出した

「!?な、何をされてるのですか!?!」

「あ?ああこれは俺のいた国の伝統みたいなもんだ。お前のやれ」

「そ、そうですか」

そう言い白雪姫も自分の人差し指を切った。

「切りましたよ御幸殿」

「よし、俺の血を舐めろ」

「そ、それはどういう。(。；)。オロオロツ。。。(；。)」

白雪姫は大垣の行動の意味が分からずオロオロとしていたが大垣は気にせず、白雪の口に自分の指を突っ込んだ。

「んっ!?!」

「舐めたな、今度は俺だ」

大垣は舐めたことを確認して今度は白雪姫の指を自分の口に入れて血を舐めた。

「わっ!?!」

「これでOKだな」

「あの御幸殿」

「何だ?」

「これにはどう言った意味が?」

「ああこれは血を交換する事でお互いが家族という事になり、家族になった事により裏切りを無くすんだよ。そして強い方が親で弱い方が子となり絶対的な上下関係を作る事で一人が裏切れば、その一人だけを敵とみなし他の国達と協力して裏切り者を排除するのがこの『血盟』と言う」

白雪は開いた口が塞がらないと言った感じて大垣を見つめていた

「分かったか?」

「は、はい大方理解しました」

「んじや行くか」

「ほえ？どこにですか？」

「ノーネームの本拠地に」

「そうですか…」

白雪姫はわざとらしく俯き大垣を上目遣いで見つめる

「なんだよ」

「いえ、御幸殿だったらもつと強いコミュニティに入れるのに何故ノーネームに？っと思ひまして」

「ノーネームには面白問題児そうな原石達問題児がいるからな」

「左様ですか」

大垣は頬を掻きバツが悪そうに白雪姫に問いかける

「他に聞いときたいことはあるか？」

「でしたら御幸殿の居た世界について教えてください」

大垣は白雪に満面の笑みで「いいだろう、教えてやるよ俺たちは家族だ、だから出来る限り隠し事はなしな」と言つて白雪姫の頭を撫でてやるのであったが白雪姫は頬を紅く染め俯いた状態でコクリとうなずいた

人間国宝ノーネームの本拠地に行くよ

白雪姫はノーネーム本拠地に保を進めながら大垣の居た世界の事を教えて貰っていた。

「俺の故郷はニツクと言う名前の国だ」

「ニツクですか」

「ああそして俺の居た世界には犯罪者が大半を占めていて襲われないように壁を作り身を守るといふ作戦を取ったんだよ」

「だが、ある時壁の中に住む住人の中に魔力を持った子供が生まれたんだよ」

「その子供が生まれてから約一世紀立つて魔力を持った人達が増えていき、その中で強い奴順に並べていき、順位を付けて順位の高い奴程危険な犯罪組織を順位が低いやつには基本調査などの依頼して順位が高い奴が討伐。みたいな感じで俺たち魔導師は過ごすんだよ」

「順位というのは具体的にどのぐらいでしょうか？」

「ここまで黙っていた白雪姫が突然喋ったことで少し驚いた大垣は白雪姫に気づかれないうつため息を吐く」

「一桁、二桁、三桁、四桁の四つが主で四桁より下は低級魔導師で一括りだ」

「理解しました」

「みなみに一桁〜四桁まではそれぞれ名前になるんだ」

「どんなですか？」

「一桁をファースト、二桁をセカンド、三桁をサード、四桁をフォースそして一桁でも一位にはマーリンの名が貰えるんだよ」

「して、御幸殿の順位は？」

「俺か？俺は…っと見えて来たみたいだな」

大垣に言われ前を見る白雪姫、そこには大きな門があり二人はノーネームの拠地へと足を踏み入れる

「御幸殿、ノーネームにはどのような経緯で？」

「問題児達似合うのとギフト鑑定だ」

「でしたら白夜叉様が良いかと」

　　と言ひ白雪姫は前方を指差し、先頭に白雪姫続くように大垣という順になって、白夜叉のいる所まで案内してもらっていた

「ここに白夜叉様は居られます」

「そうかサンキューな白雪姫お前は待機だ」

「いえ、私も着いて行った方がいいかと」

「何故だ？」

「はい、私の神格は白夜叉様に頂いたもの私が白夜叉様に頼んだ方が
良いかと思ひみして」

「そうか、分かった」

　大垣は渋々と言った感じでした。実際のところ自分一人で行って「ギフト鑑定して」と言つて、はいどうぞと言つてもらえる気がして無かったので丁度いいと言つたら丁度いいのかもしれない

　店の中に入り、白夜叉の自室の前で止まり襖の奥にいる白夜叉へと声をかける

「白夜叉様中に入つても宜しいですか？」

「白雪姫か、良いぞ入れ」

「わかりました」

　白雪姫が入室の了承を得たので、白雪姫が入り後を追うように大垣も中に入る

「白雪姫にも等々男が出来たか」

「いえ、こと方は私のご主人様でございます」

「:!?ほおこの男は白雪姫を倒したというのか」

　　白夜叉は一瞬驚くもすぐに冷静を取り戻す。

「ワシは白夜叉じゃ東区最強の階層支配者フロアマスターと呼ばれてもおる」

「俺は大垣御幸だ白雪姫の主人にあたるものだ。よろしく」

「ああよろしいう、して今日はどんな要件じゃ？」

「ああ俺のギフトを鑑定してもらいたんだ」

　　白夜叉は少し口角を上げて大垣を見る、見る目は何かを企んでいる様な悪戯っぽい目であった。

「見てやらんこともないがタダでは言わん」

「じゃあ力試しでもするか？俺は構わん」

「話が早くて助かるのお」

白夜叉が手をパン！と叩くと遠く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る、白い太陽のみ。まるで星を一つ、世界を一つ創り出したかのような奇跡の顕現。

そして白夜叉が大垣に向かって問いかける

「私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への『挑戦』か？それとも対等な『決闘』か？」
数秒の静寂、

「勿論、決闘だ」

先に言葉を切ったのは大垣御幸だった

「なっ!？」

「ほう」

驚いたのは隣に立っていた白雪姫だった、当然の反応と言えるだろう
白雪姫は白夜叉の力を知っているからだ。たが大垣は白夜叉を前

に軽薄な笑みを浮かべ大垣は言う

「この程度で最強？ 笑い死にを狙ってたならお前の勝ちだな」

「…」

「こんなものを創ったところで俺に勝てるつもりだったか？」

「…」

「残念だったなこんなもん幾ら作っても俺には傷一つ付けねえよ白夜又…いやカス夜又」

瞬間世界が白夜又の殺気で覆われた、その強さは白雪姫も片膝をつき意識を保っているのがやつの程であった。がその殺気を一点に受けているはずの大垣は仁王立ちして白夜又に見ていた

「ほんとに期待外れもいい事だ」

「!!?」

白夜又の重圧を殺気を大垣はその全てを自身の殺気で吹き飛ばし、

白夜又より強い殺気で今度は大垣が白夜又に向かって殺気を飛ばす

「どうだ？ お前のと質も重圧も全てが違うだろ？」

(まさかこの私の重圧を押し返しそして私に先程よりも強い殺気ととばすとは…この餓鬼一体)

「…」

(この程度ならまだ余裕か…じゃあ)

「……なっ!?!」

大垣は徐々に徐々に殺気の密度を上げていきその強さは空間を歪ませるほど強くなった時、白夜又はたか膝を付き胸を手で抑えていた
…

まるで心臓を押さえるかのように

「カハッ……!? ア、ガ……!」

「まだまだ上がるぞ?」

大垣は更に殺気を強めていきいつしか白夜叉は気を失っていた。大垣は失敗したと髪を掻きその場で座り新たな魔法を考えるであつた。

数分後

「んっ……あっ……ん!?」

白夜叉が先に意識を取り戻し我に返る

「ようやく起きたか」

「私は負けたのか」

「ああ」

そこでようやく白夜叉は自分が今ある状況を理解しようで、俯き拗ね始めた。

「早いことギフト鑑定してくんねえか?俺が勝ったことだしよ」

「それはそうじゃが…なんか腑に落ちんの」

「つべこべ言つてないで早くしろ、俺も暇じゃねえんだ」

「分かっておる」

白夜叉がパンパンと柏手を打つ。すると三人の眼前に光り輝く一枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されている。

スペースグレーのカードに大垣御幸・ギフトネーム”ブラアドウサアステイ殺気操作”

大垣は前に出できたギフトカードを手に取り物珍しそうに眺める

「はあくこんなちつこいのがギフトカードか?」

「無くすなよ？再発行はできんからな」

白夜叉は笑いながら大垣にそう告げる

「わあってるよ！じゃあな」

大垣はそう言って白雪姫を引きずりながら白夜叉の店を後にするのであった

人間国宝と問題児達が決闘するみたい

大垣と白雪姫が白夜叉の店を後にしてから、二人は今夜止まる宿探しをしていた。

「まさか白夜叉様を殺気だけで倒すなんて…どんだけ規格外なのよ」

「普通、通常運転だ俺は」

そんな会話をしていたら前から三人の少年少女が歩いてきた。

「帰ったら将棋でも指さねえか？お嬢様」

「いいわね、この久遠飛鳥の実力を見せてあげるわ」

「私もやる」

そんな事を言いながら通り過ぎていった三人を見て大垣は少し笑みを浮かべていた

「白雪姫、さつきすれ違った三人を追ってみようぜ」

「ほえ？いいけど」

そんなこんなで大垣と白雪姫は三人をおうことにした……がそれに気づかない様な程度の低い奴らではなかつとようですぐにバレた。

十六夜が不機嫌そうに二人に問いかける

「おい、お前らさつきから後を付け回して俺たちになんか用か？」

「用って程のものでもないが」

「じゃあなんだよ」

「ノーネームの逆廻十六夜と久遠飛鳥と春日部耀って人達を探しててね」

「それは俺達の事だが？」

「そうか…」

大垣は確認をしたところで問題児達に殺気を少し解放する、だが問題児三人には十分過ぎるほどのものだった。

辛うじて意識を保って居たもののその場から動けるものは一人としていなかった……がそれも一瞬だけであったようですぐに解放された

「フフフ…フハハツ…フハハハハツ!!」

大垣は殺気を抑え、大笑いした。問題児達は突然の解放から呆然と

大垣を見ていたが十六夜が不意に口を開く

「…が…しい」

「ああ？」

「…な…何で笑ってんだよ」

大垣は十六夜の質問に悪党じみた笑みを浮かべ質問に答える

「いや、何お前達の力を拝見しようともおったが、あまりにもお前達が弱いもんでつい渡っちまったんだよ」

プツンツ

問題児達の中で何かが切れた音がした。それを前に立っている大垣がいち早く反応した

「ほお…押し返したか」

大垣は内心驚きつつ三人に対しての評価を一つ上げることにした。

その上で大垣は三人に問う

「俺と一戦交えないか？」

「はっ」

三人を代表して、十六夜が返事をする。三人の目は殺す気満々と言った眼差しで大垣を睨んでいた。

「願ったり叶ったりだぜ」

「そうね。やられっぱなしは性にあわないわ」

「右に同じ」

大垣はふんぞり返って笑いたいのを我慢し、力を試すいい機会だと内心ほくそ笑んでいた。

「それじゃ始めるとしよう」

対峙する大垣と問題児三人、ふと大垣は何かを思い付いたように地面に手を付く、すると魔法陣が浮かび上がり椅子を創り出した。

問題児達は疑問に思いながらその様子を見ていた、大垣は創った椅子に座るとある条件を投げかけた

「賭けをしないか？」

十六夜以下二名は眉をピクリツと動かし、その内容を聞く

「どんな内容かしら？」

「簡単だ、俺が勝ったら些細な願いを聞いてほしい」

「私達が勝ったら?」

大垣は飛鳥の間に自身の首を親指で指指す

「俺が負けたら、俺の首刎ねる」

「!!?」

当然の驚愕、動揺を隠しきれない三人と自身の隣にいる一人

恐る恐ると言った感じで白雪姫が大垣に問う

「み、御幸殿それはどういった経緯が」

大垣は歪んだ笑みを浮かべ白雪姫の質問に対しての返答をする

「俺はこんな下らん茶番に命かけてんだよ、だから お前らも命懸けで来いっと言うことだ」

十六夜が青筋を立てながら大垣が投げかけてきた条件に対しての返答をする

「舐めやがって! いいだろう受けて立とう」

「よしっじゃあお前らの為に勝利条件を付け加えましょう」

「内容は」

「俺はこの椅子から立たない、お前らが俺を立たせたらお前らの勝ち逆に俺はお前らが降参するまで。どうだ?」

十六夜・耀・飛鳥があからさまな殺気を放ちながら怒りに任せながら条件を呑む

「どこまでも舐め腐りやがって! 殺す! 絶対に殺す!」

「勝てるといいな、白雪姫開始の合図頼んだわ」

「わ、わかりました」

両者の間で緊迫した空気が漂う中白雪姫の開始の言葉が放たれる
「始め!」

合図と 동시에大垣に接近したのは十六夜だった、十六夜の持つ星も揺るがず拳が大垣当たる……

筈だった…

だが現実には違った
すうこ

「嘘……だろ……」

大垣は十六夜の拳を人差し指一本で止めた。当たりの地面には罅が入り両者の周りは陥没して大変なことになっている。

そんな中大垣は歪んだ笑みを浮かべお返しとばかりに十六夜の顔面にパンチする

「嘘だと良かったな」

「ガハッ！」

大垣のパンチを食らった十六夜は遙か後方へ吹っ飛ばされていった。

残った二人は一瞬のアイコンタクトで自分の役割を決め大垣に攻撃する。

「ほう、お前が来たか飛鳥」

飛鳥はギフトから十字の剣を取り出して大垣に向かって振りかぶった、だが生前最強と謳われた魔導師の大垣はその剣に耀が自身のギフトを使い剣の周りに風を起こして剣の速度を格段に上げているのを一目見た大垣は瞬間的に見抜いていた

（発想はまあまあと言ったところか……）

目にも止まらぬ速さで向かってくる剣に対しての大垣は余裕と言わんばかりに頬杖を付き飛鳥の剣を人差し指と親指で受け止めた

「なっ!?」

「発想はいいぞ、だがもうひと工夫欲しい所だな」

そう言うのと揃んでいた剣を飛鳥から奪い取り、それを十六夜がいる方向へ投擲した

「よっつと」

剣は光の速さで十六夜の方へ飛んで行き十六夜の居るであろう所で爆破した

「……まで弱いとちよつと残念だな」

「まだまだこれからだぜ？糞餓鬼」

声のする方へ目を向けると、そこには服がズタズタの十六夜が先程大垣が投擲した剣を持って立っていた

「俺が投擲した剣を難なく止めたか…」

見た目からして難なくと言った具合では無かったようで爆破のダメージだけは負っているようだった

十六夜は手に持つ剣を力任せに大垣に向かって切りつけるが大垣の姿はただの砂となって閉まった、すると後から大垣の声がして一同がそちらに振り向くと手を叩いて賞賛の声を漏らしていた

「ブラボーブラボー君たちの実力は大体分かった、では次に俺が見せるでしょう」

そう言うと大垣はおもむろに石ころを手に取り空へと投げた

インクルシオ・レーゼ
「攻撃魔法展開」

大垣が魔法を展開すると空中にあつた一つの小さな石ころは剣・槍・斧・矢と様々な武器に様変わりして三人にその切っ先が向いていた

その数…

「どうする？…三下？」

数百あまり

「はは」

「こんなのかないつこないわ…」

「嘘…でしょ」

飛鳥と耀は絶望と恐怖で顔が真っ青になっていた、だが十六夜ただ一人だけは違った

「お嬢様は土で壁を作ってくれ」

「…そう言う事ね分かったわ」

飛鳥は十六夜の考える事にいち早く気づき行動に移すが耀はまだ理解ができていないらしく、小首を傾げていた

それを見た飛鳥は耀に十六夜が考えた作戦を耳打ちで伝える

「春日部さんつまりこうゆう事よ」

「フム（ ⊠ ω ⊠ * ） フム分かった」

「作戦会議はおわったか」

(敵を前にしてよく悠長にしてられるな、その代わりに十六夜が俺を見張ってるわけか)

「律儀に待っててくれたのね、ありがとう」

「ああ次の攻撃でお前を倒す」

「倒す(・・・ω・・)」

「じゃあまずは一発目」

途端大垣の上で待機していた武器の一つの剣が三人目掛けて飛来するがそれを十六夜が掴み取る

「また取ったか」

「こんなの止まって見えるぜ」

「はっ次々行くぞ?」

大垣が指を鳴らすと数百ある武器がどんどん飛来していく

飛んでくる武器を十六夜が手にした剣で捌いていき距離を詰めていく

「はああああ!!」

「ほう」

ついには大垣の懐まで踏み込み、剣を持つ手の反対の手で大垣目掛けて剛腕を振るう

「学習しないやつだ……!?!」

ここで大垣があることに気づく、今自身の手は土で拘束されている事に

「いい作戦だ……」

十六夜の拳が当たる、勝利を確信した三人は薄くて笑みを浮かべていた。そこに冷めきった声で大垣が切って放った

「だがまだ足りない」

「!?!」

デウスチエーン
「神鎖」

空中で停滞していた数本の武器が形状を鎖に変化させ、十六夜の腕や体に巻き付き動きを止めて先程まで勝利を確信していた顔が絶望へと変わる

「どうする?..まだやるか?」

「「降参」」

時間にして約5分と短いが彼らからしたら30分ぐらいはあつたと後に語っていたがそれはまだ別の話